

# 京都大学（中央）総合研究15号館（旧建築学教室本館） 改修その他工事における諸調査について

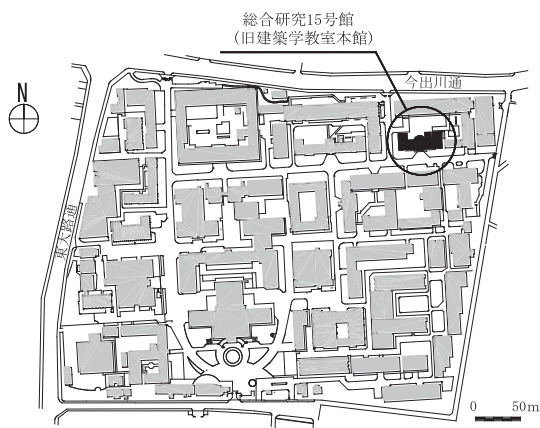
副主任研究員 廣岡 幸義

## 1. はじめに

当協会ではこれまでに京都大学の複数の歴史的建造物の耐震診断や補強設計業務を受託し、併せて工事報告書の作成を行ってきた。本誌でも度々それらの報告を掲載してきた。このような経緯から、京都大学（中央）総合研究15号館（旧建築学教室本館）改修その他工事の報告書作成業務を受託する事となった。

工事は躯体コンクリートの中性化対策を主とした内容で、平成29年4月7日から12月28日迄の約9ヶ月間にわたり行われた。工事期間中に諸調査を行い、調査結果と共に工事内容を報告書にまとめた。

本稿では工事の概要と、当協会が主に担当した調査の結果を中心に報告を行う。また報告書作成時に触れる事が出来なかった、新築時に関与した工事業者の来歴を追記する。



京都大学 吉田キャンパス 本部構内配置図

## 2. 京都大学（中央）総合研究15号館 （旧建築学教室本館）について

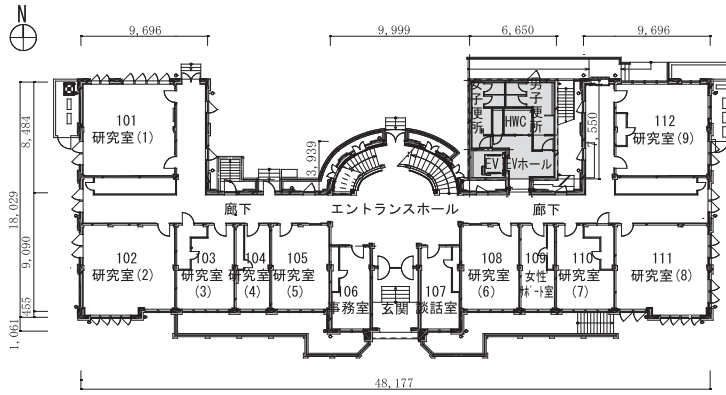
### 2-1. 概要

京都大学（中央）総合研究15号館（旧建築学教室本館）、は当時京都大学教授の武田五一が設計、構造設計は同じく教授の日比忠彦が分担したと推測され、大正11年(1922)に竣工した。京都大学で最初に鉄筋コンクリート造を採用した建築であり、意匠面ではセセッションの様式を採用しており、当時京都大学の中で構造・意匠とも最先端の建築であった。

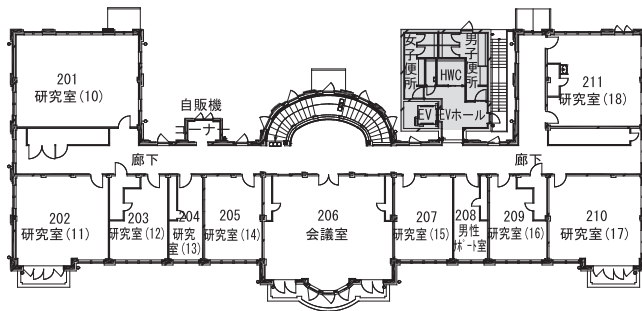
旧建築学教室本館は京都大学吉田キャンパス本部構内の北東隅に所在する。同キャンパスには「百周



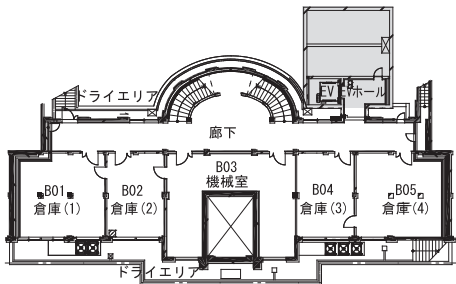
京都大学 吉田キャンパス 位置図



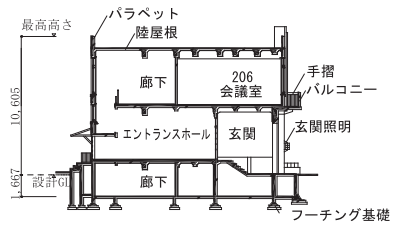
1階平面図



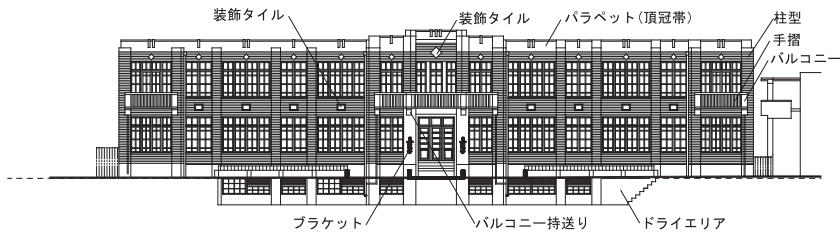
2階平面図



地下1階平面図



断面図



南立面図



年時計台記念館」や煉瓦造の歴史を感じさせる校舎が、現代建築の校舎と同居しながら、現役として現在も利活用されている。それらの一部は本建物とともに京都大学の「保存建物」として保存が図られている。

## 2-2. 建築学教室の開設と校舎新築の経緯

京都大学は前身である第三高等学校を引き継いで明治30年(1897)に設置され、建築学教室は大正9年(1920)に開設された。開設時には建築学教室専用の校舎を持たず、大正天皇即位礼の下賜建物といわれる工学部大教場を間借りして、旧建築学教室本館の竣工を待った。開設当初の研究教育は、土木工学第三講座であった日比忠彦及び名古屋高等工業学校校長であった武田五一が教授、元京都府技師天沼俊一が助教授として任に当たった。

校舎の建設は、大正8年(1919)の予算要求時には煉瓦造で計画されていた。その後、武田が建築学科新設設立委員に嘱託され、この間の詳細な経緯は不明だが具体的な計画が進められた結果、大正9年(1920)には煉瓦造の計画を変更し武田自身実績のある鉄筋コンクリート造での図面が作成された。実際、京都大学の校舎は旧建築学教室以前の校舎はいずれも煉瓦造や木造で、例えば大正6年(1917)建築の土木工学教室本館は煉瓦造であり、また旧建築学教室本館建設以後の大正14年(1925)建築の本部本館は鉄筋コンクリート造であり、計画の経緯とともに、建築された校舎からも建築構造の変換点であることが言える。

## 2-3. 建築概要

構造は鉄筋コンクリート造、地上2階、地下1階、屋根は最上階の2階スラブにパラペットを立ち上げる陸屋根である。

既存棟と増築棟からなり、増築棟は今回の改修で新設した部分で、エレベーターとトイレを備えている。延床面積は既存棟が1567.25㎡、増築棟は121.38㎡。既存棟の最大間口は48.177m、最大の奥行は18.029m、最高高さは設計G.L.より屋上のパラペットの上端まで10.605mである。

平面は南を正面とし、東西に長く、東西端に北向きに突出部を設けた「コ」の字型を基本に、中央玄関の北側に半楕円形に張り出した階段室を設けている。各階には階段室のある内庭に面して片廊下を設け、内庭の反対側に地階は4室の倉庫と機械室、1階は大小各12の部屋、2階は11の部屋を設ける。地階は南北にドライエリアを設ける。

外装は既存棟の1・2階外壁をあずき色のタイル張りとし、タイル壁面を挟むように頂部パラペット、地階基部ドライエリアをモルタル洗出しとして縁取る。玄関廻り及び2階バルコニーも同様にモルタル洗出しとし建物の端部、中央を際立たせる。各階には縦長の



工以降、昭和40年(1965)までは、戦争を挟む期間をのぞくと10年間隔で行われていた。その後防水工事の間隔が長くなったが、屋上防水の維持管理に重点が置かれていたことには変わらない。平成6年(1994)の防水改修に際しては、陸屋根を勾配屋根で覆う工法がとられたが、平成25年(2013)には勾配屋根は撤去され、もとの陸屋根の姿を維持することになった。今回の工事で既存天井の解体に際し、2階の一部に雨漏り跡が確認され、屋上防水工事が建物維持の重要課題であったことが再認識された。

## 2-5. 京都大学と武田五一

本建物の設計者である武田五一は、「関西建築界の父」、「建築意匠学の泰斗」との異名をもち、教育者でありながら設計活動を旺盛に行った教授建築家としても知られている。

武田五一(明治5年(1872)~昭和13年(1937))は広島県福山市に生まれ、明治30年(1897)に東京帝国大学造家学科卒業後、同大学大学院、助教授を経て、英独仏国へ図案学研究のため留学する。帰国後の明治36年(1903)、京都高等工芸学校教授(現在の京都工芸繊維大学)に転任、同時に京都府技師を兼務し古社寺の保存修理事業にも関わる。大正7年(1918)に名古屋高等工業学校校長に転任したのち、大正8年(1919)京都帝国大学建築学科創設委員を経て、大正9年(1920)学科設立とともに京都大学教授に就任する。

京都大学では教育活動の他、大正11年(1922)から昭和5年(1930)にかけて営繕組織で設計顧問を務めており、共同担当者とともに少なくとも27棟の新築や増築に関わる。主な建物は、大正14年(1925)竣工の本部本館(現百周年時計台記念館)であり、あずき色の外装タイルは旧建築学教室と共通する。その他登録文化財の文学部陳列館の増築(大正14年(1925)、本部構内に所在)や東アジア人文情報学研究センター(昭和5年(1930)、北白川東小倉町に所在)も武田の在任期間の建築になる。共同担当者は永瀬狂三や森田慶一、坂静雄、大倉三郎、東畑謙三らの研究者や建築家陣が関わる。

## 3. 改修工事の概要

### 3-1. 改修工事概要及び工事に至る経緯

京都大学では全施設の耐震性能の調査を行い、危険性の高い施設から順次耐震化を図っている。旧建築学教室本館は平成13年(2001)度に耐震診断(1次診断)を行ったところ、耐震性は有するが、コンクリートの中性化が進んでいることが明らかとなった。この結果を受けて、平成29年4月より躯体の中性化対策を主とし、間仕切りの変更、内装・外壁の改修及び修理、建具の取替え、電気設備及び機械設備の更新、増築棟新築の工事を行うことになった。なお本建物は大学で定めた「保存建物」であり、外観、1階及び2階廊下と

研究室のうち1室を意匠の保存範囲と定め、工事を行った。

### 3-2. 事業組織

国立大学法人京都大学(以下「京都大学」)が発注し、設計は京都大学施設部、(株)内藤建築事務所、(株)総合設備コンサルタントが行い、京都大学施設部が工事監理を行った。工事は建築工事を(株)松村組が、電気設備工事を松田電気工業(株)、機械設備工事を(株)博電工業がそれぞれ請け負った。

### 3-3. 工事内容

- A. 仮設工事** 工事範囲を仮囲いで囲い、工事車両出入場のため3ヶ所の出入口を設けた。資材の搬出入は、必要に応じて揚重機を使用した。建物外部には外部足場を設置し、防音シートを張った。内部にも枠組足場、ローリングタワーを設置した。
- B. 解体工事** 躯体の補修工事、機械設備及び電気設備の更新を行う為、殆どの内装材、設備を解体した。外壁の内、増築棟との取合部分、及び破損した外装タイルを解体撤去した。再用する建具、床材、照明器具は一時保管した。
- C. 躯体工事** 外壁はコンクリートの中性化が進んでいるため、キクスイ BR 工法により躯体中性化補修を行った。脆弱部を除去し、鉄筋の錆除去、清掃を行った上で、アルカリ付与材を施工し中性化対策を行い、鉄筋防錆、ポリマーセメント等で断面修復を行い、中性化の進行を抑制するため表面被覆を行った。部位毎の劣化状況に応じて施工法を変えた。その他の部分の躯体は広範囲に劣化がみられたため、クラックの補修、断面修復等を行った。また地下階の土と接する部分は壁の増し打ちを行った。
- D. 外壁工事** 外壁のタイル貼部分、モルタル洗出し部分にクラック、モルタル及びタイルの浮きがみられたため、樹脂注入、タイルの貼替を行った。また外壁の漏水防止のため透明外壁防水材を塗布した。外観に影響が無いよう、タイルは改修前と同色のもの、防水材は透明度の高い材料を選定した。
- E. 建具工事** 研究室としての利便性向上のため、建具は改修前の木製建具の意匠にならない金属製に取替えた。地階及び2階の一部は、木製建具を補修した上で再用した。階段室のステンドグラスは、割れた部分を取替え、清掃を行い、元の位置に戻した。
- F. 内装工事** 断熱工事、軽量鉄骨工事、ボード張工事、木工事、左官工事、床工事、塗装工事を行った。

意匠の保存部分とした廊下の壁は、断熱工事後、躯体の歪みの補正のためボード張を行った上で、造作(木)工事、塗装等の意匠の復原を行った。天井はモルタル塗りの上、



図1 躯体劣化部マーキング状況（地階廊下）



図2 躯体中性化補修表面被覆吹付状況（2階廊下）

塗装を行った。2階研究室の1室は、床パーケットタイル（寄木）貼を復原した。改修前は湿式工法であったが、床の平滑を保つため接着材を使用した乾式工法とした。

**G. 設備工事** 電気設備工事は電灯設備、幹線設備、情報・通信設備の更新・新設を行った。電灯設備の内、玄関外壁ブラケット（当初）、エントランスホール廻りの照明器具は電球をLEDに交換して再用した。機械設備工事は空調換気設備、給排水衛生設備、防災設備の更新・新設を行った。特に空調換気設備の室外機は建物の外観意匠を損なわない様、地下ドライエリアでの設置、屋外の場合目隠柵で囲った。

**H. 外構工事** 縁石の据替・新設、アスファルト舗装、バリアフリー対策のため北東出入口に通じるスロープを新設した。

**I. 増築棟新築工事** 既存の平屋建てトイレ棟を解体し、鉄筋コンクリート造地上2階、地下1階の増築棟を新築した。増築棟には昇降機設備を設け、既存棟の各階と床高を揃えて段差無しで接続した。1階と2階の各階には男女及び多目的トイレを設けた。

#### 4. 建築技法

各種工事の建築当初における技法について、目視、寸法の計測による調査を行った。

**A. 躯体及び型枠** 躯体は耐震壁付ラーメン構造の鉄筋コンクリート造で、基礎は地盤上に独立基礎を設ける。柱と梁、梁とスラブの入隅にはハンチを設けており、構造体であるが化粧あらわしになっており、造形的にも変化に富む立体的な姿である。

鉄筋は丸鋼を使用し、継手は重ね継手が用いられる。骨材は長辺が12～37mm程度で、形状は角が無く丸みを帯びている。配筋はスラブ、壁ともシングル配筋、柱・梁には帯筋を用いる。梁の下端筋は柱際で上方に折り曲げ上端筋として扱う折曲筋であった。

型枠は、壁・スラブ下では巾160mm前後の板を横使い、柱では縦使い、梁では長手方



図3 床パーケットタイル貼（2階）



図4 外壁補修（タイル復旧状況）

向に並べていた。型枠部材としてのセパレータは壁では竹を用いていたが、梁・柱では相当する部材は確認できなかった。その他巾木や教室の黒板を固定する木レンガが確認された。

**B. 外装タイル** 建物を特徴付けるあずき色のタイルが貼られている。役物はなく全て小口平タイル（108×60mm）で構成され、出隅・入隅はタイルの小口を斜めに削ぎ、突き合わせて納めている。厚みは14mmと11mmが混在するが、仕様書から14mmが当初と考えられる。割付は縦横に目地が通る「通し目地」で、目地は「覆輪目地」である。1～2階の窓間は矢筈貼のタイルパターンを下敷きに中央にはあずき色とえんじ色タイルを組み合わせた文様をあしらひ、2階窓上部にも、タイルを45度傾けて菱形文様のパターンをあしらう。これらのパターンは、通常多色の小ぶりのモザイクタイルを用いることが多いが、本建物では部分的にひと廻り小さいタイルを使用しているものの、小口平タイルのみで施工するところに特徴がみられる。

類例に京都大学の百周年時計台記念館があるが、一見同じタイルを使用しているように見えるが、観察を進めるとあずき色を基本とした同系色の小口平タイルをモザイク状



図5 セパレータ（竹製、L=12cm 壁躯体）



図6 梁スラブのハンチ（2階）

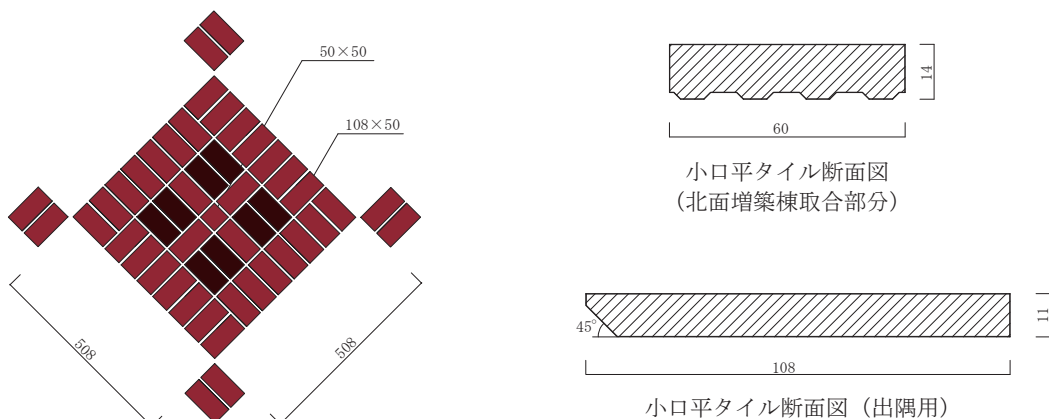


図7 タイル貼パターン及びタイルの仕様(断面)

に貼っており、旧建築学教室本館よりも複雑かつ多様な仕様となっている。

**C. 屋根・庇** 屋上の陸屋根はスラブに勾配を付け、シート防水が施工されている。定期的に改修が施されており、現在のものは平成25年(2013)の改修によるものである。

北面中央と東西翼部の北向きに各々出入口に、切妻及び片流れの庇が取付く。木造の銅板葺屋根で、木部は腕木を方杖で支え、垂木掛と母屋を置いて垂木を並べるシンプルな造りで、木部はペンキ塗装が施されている。本体建物との構造体の対比が際立つ。

**D. 内装** 床はパーケットタイル貼、床タイル貼、モザイクタイル貼が見られ、下地はいずれもモルタル塗である。パーケットタイル(寄木張)は、長方形の広葉樹(仕様書によるとナラ、カバ、ケヤキなど)の板を3枚一組または2枚一組として、市松模様、矢筈模様として敷き並べている。モルタル上に直接施工する湿式方法である。ユニットでない一枚ずつの敷き込みで、目地の隙間は不定で不陸が多く、パーケットタイルの比較的初期の事例と考えられる。モザイクタイルには◇ISの刻印がみられたが、厚みが4mmであり、この厚みの仕様は戦後から昭和44年の間に製造されたものと推測され、当初からのものではない。

フローリング又はシート貼はいずれも後の改修になるが、下地の転ばし根太は当初のものが残っていた。中でも旧212号室には根太の間に砂が敷き詰められており、これは当初この部屋が器械室であったため、砂を敷詰める事で騒音や振動の低減を図ったようである。

壁・天井は建造当初躯体コンクリートに漆喰が塗られていたが、その後の改修の結果多くの部屋でボード天井が張られているのが現状である。

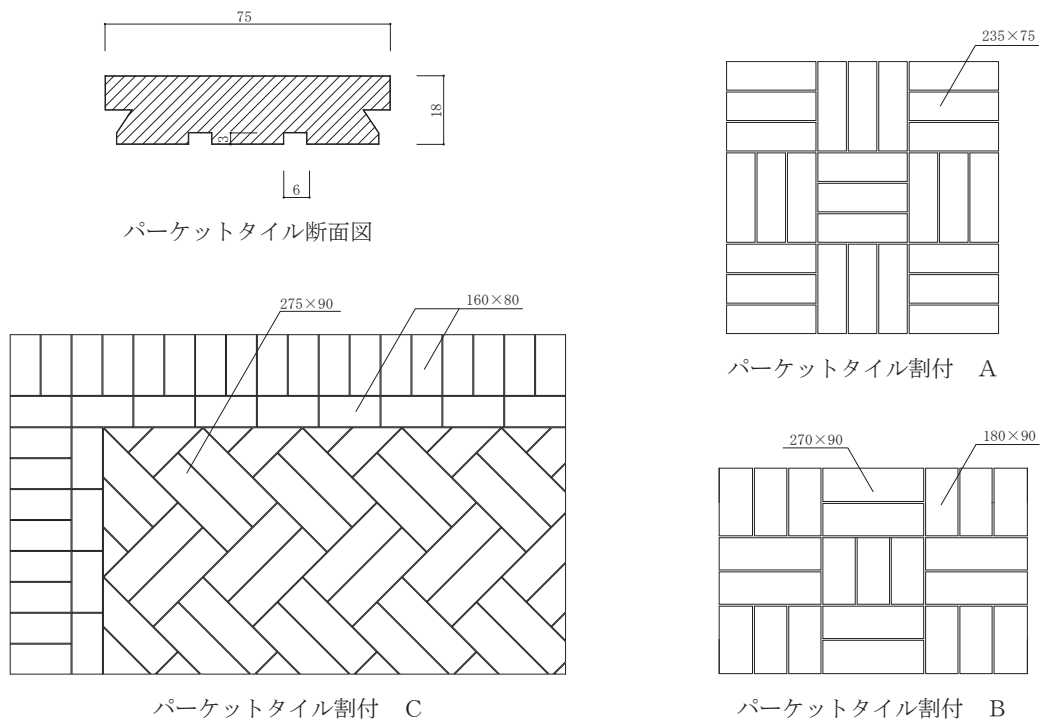


図8 パーケットタイルの断面及び割付パターン

**E. 建具** 改修により部分的にアルミニウム製建具が建て込まれているが、当初の木製建具が残っていた。

窓は躯体柱間に縦長の嵌殺欄間付の上げ下げ戸又は片開開戸を一単位として、2連又は4連に変化を持たせて建て込み、外観を特徴付けている。2階階段室の上窓にはアラバスク模様やイチョウの葉をデザインしたステンドグラスがはめ込まれている。

玄関出入口は欄間付の三連の建具で、両脇を片開きとして、中央間を嵌め殺しとしており、出口と入口の動線が交差せず人が流れる事を意図したものと考えられる。

教室への入口にはほとんどの箇所片開きの框戸が建て込まれており、厚みが最大58mmになる重厚な建具である。この他板戸、舞良戸もみられた。

建具の塗装は外部側を白、内部を濃い目のあずき色に塗り分ける。建具金具はクレセント、丁番、滑車、調整器、タッセル掛、南京落し、フランス落し、引手、取手、ドアクローザーなど各種のものが取り付けられているが、何れも後の改変のため数種類ずつの意匠がみられた。タッセル掛からカーテンが設えられたことが判明するが、カーテンは残っていなかった。一部の金具に陽鑄銘文が施されおり、そこから舶来品の使用も認められた。

- F. 照明器具** 当初の器具は、玄関外壁に取付くブラケットのみであり、他は全て後補であった。玄関ブラケットの形状は円形の傘と八角形の火袋部と器具全体を受けるアームからなり、灯籠を思い起させる意匠である。武田五一設計による京都の四条通や二条橋の街灯が同様のデザインであり、武田が好んで用いた照明器具の意匠で設計されている。
- G. その他装飾** 外壁はタイル貼で、内部は大壁の漆喰塗であり、遠目にはモダンで平滑な壁面の建物であるが、特に玄関廻りに局所的に装飾が施されている。正面玄関を飾る額縁のレリーフには雷紋が施されている。山口県旧県会議事堂の絨毯のボーダーにも同様の雷紋が使用され武田の嗜好が確認できる。また玄関の柱頭飾や外壁の頂冠帯には、単純な幾何学紋を組み合わせてデザインされており、セセッション様式の特徴がよく表れている。



図9 正面玄関出入口扉



図10 玄関 額縁飾(上)と柱頭飾(下)



図11 玄関照明器具

## 5. 資料

### 5-1. 図面

当初新築時の意匠・構造の図面が33枚保存されている。工事名は「京都帝国大學工學部建築學教室設計圖」であり、平面図には大正9年5月24日の日付が記入されている。

この他に各時期に行われた改修図面が多数保存されている。

### 5-2. 工事（納品）業者各種書類

旧建築学教室本館の当初新築工事は直営で行われており、工事（納品）業者は入札により決定されていた。注文書・契約書・入札一覧・内訳書・竣工調書などが保存されており、京都大学営繕課と工事業者との直接の文書のやりとりが確認できる。表1に当初の建築時の工事業者一覧を示す。この一覧で示した業者では例えば、型枠や造作工事の業者が欠落

しており、このことから他にも複数の工事業者が存在したと考えられる。

工事（納品）業者の所在地は京都市内が半数を占め、それらの業者は従来からの伝統建築に関連のある工種である（表1 番号に○印）。一方近代以降に発展した工種の業者の所在地は大阪、関東、その他であり、傾向の違いが明確に出ている。

表1に示した工事（納品）業者で現在も事業を行う業者について以下に紹介する。

**表1 工事業者一覧（書類上の日付順）**

番号	工 種	工事（納品）業者	所 在 地
1	セメント供給	小野田セメント製造株式会社	山口県小野田町田町
2	貼付煉瓦供給請負	大阪窯業株式会社	大阪市北区
3	陸屋根 S.P.C 防水工事	都市工業株式会社	大阪市西区
④	堅樋金物并ニ諸鉄物取設工事	湯浅太三郎	京都市上京区
⑤	木材購買	材木商 木庄 河窪寅之助	京都市
⑥	石材工事	土木建築石材彫刻請負業 内田鶴之助	京都市上京区
⑦	内部漆喰壁塗及モルタル竝ニ人造石塗共工事	鉄筋コンクリート煉瓦築造左官人造石請負業 前田岩吉	京都市
8	ペイント塗用塗料供給	日本ペイント製造株式会社	東京府品川町
9	床カ伊丹式フローリングブロック工事	合資会社伊丹商店	横浜市南吉田町
10	建具供給	小出啓三	名古屋市西区
⑪	建具金物供給	田中文治郎	京都市下京区
12	窓硝子障子揚卸用鉛錘リ供給	田中文治郎	京都市下京区

**(1) 小野田セメント製造株式会社** 民間初のセメント製造会社で明治14年(1881)設立。

秩父セメントなどとの合併を経て、現在は太平洋セメント株式会社。明治時代のセメントの出荷はセメント樽(400ポンド/樽≒181kg、その後規格の変動がある)詰であった。大正元年(1911)には麻袋の使用が始まっていたが、本工事の内訳にはポルトランドセメント「壹仟樽」と記されており、樽詰のセメントを使用していたことがわかる。

**(2) 大阪窯業株式会社** 前身の会社は明治15(1882)年設立の、当時新興した硫酸工業関連の「硫酸瓶製造会社」である。その後時代の要請に応じて様々の分野の新製品の製造を行っており明治21年(1888)に有限会社大阪窯業に改称。明治18年(1885)から建築用煉瓦製造を開始し、大正元年(1912)からは貼付煉瓦(タイル)、大正7年(1918)からはセメント製造を始める。大正末には煉瓦の製造を縮小し、昭和に入りセメント業

を分離して大阪窯業セメント株式会社を設立する。昭和22年(1947)に耐火煉瓦製造を分離し、大阪窯耐を設立する。大阪瓦斯ビルディング、綿業会館(重文)、大阪ビルディング等の近代建築は大阪窯業株式会社製のタイルが使用されており、近代建築の一時代を画した。

**(3) 都市工業株式会社 (S.P.C 防水工事)** 都市工業株式会社は、米国ニューヨークのスタンダードペイント社(のちのラバロイド社)の防水製品の日本の代理点であり、専門業者であった。スタンダードペイント社は明治19年(1886)に設立し、当初防水製品としてアスファルトペイントを取り扱っていたが、フェルト繊維にアスファルトを含浸させた物と、硬化した被覆層とを組み合わせた「ラバロイド」を開発し、これが好評でそのまま社名になった。ラバロイドの日本での取引は、明治22年(1889)から穴原商會が代理店契約を結び、その後明正社が引き継ぎ、大正8年(1919)以後に明正社の建築部が、都市工業株会社となり、取引を引き継いだ。RC造の陸屋根の防水は、RC造の歴史と密接な関係を持ち、明治時代～関東大震災までは舶来品が独占していたが、関東大震災以後国産品が使用されるようになるが、本建築の建築時期は、国産品の流通が殆ど無い時期に相当する。

**(4) 内田鶴之助** 京都市白川で石材工事業を営む北白川の石工の一人である。鶴之助の息子である内田鶴次、さらに現在孫の内田隆雄氏が事業を継承している。屋号は「鍵屋」。

内田鶴之助(明治18年(1885)－昭和35年(1960))の作品は表2に示す通り、武田五一設計の作品を多く手掛けているが、その他大正天皇即位式の際に建設された京都御所の賢所の基壇なども手掛けている。

表2 内田鶴之助 作品年表

作 品 名	所在地	年 代	設計
木下博士銅像台座	京都大学構内	大正元年(1912)	武田五一
福山尋常高等小学校御真影奉安庫	広島県福山市	大正元年(1912)	武田五一
東本願寺前街路設備	京都市下京区	大正3年(1914)	武田五一
佐久間象山先生遭難之碑	京都市中京区	大正4年(1915)	武田五一
故鈴木教授銅像台座	京都大学構内	大正10年(1921)	武田五一
阿部伊勢守正弘公銅像台座	広島県福山市	大正11年(1922)	武田五一
高山彦九郎先生銅像趾跡記念建碑	京都市東山区	昭和19年(1944)	—

内田鶴次は京都市の五条大橋の勾欄を北木石で施工し（昭和34年(1959)、鋼鉄橋であるが勾欄はかつての面影を残した石造で、擬宝珠の一部は再用材を用いている）、後鳥羽順徳帝大原陵の修理（十三重塔）昭和45年頃(1970頃)、石清水八幡宮の一之鳥居の修理（昭和3年(1928)）を行った。

なお京都市堀川第一橋（中立売橋）は明治6年(1873)に建設された石造の橋であり、銘文に石工山城國愛宕郡白川村内田徳左衛門の名前が確認できるが、内田鶴之助との関連が想定される。

北白川は北白川花崗岩（白川石）の産地として知られているが、次第に石を切出す職人（山方）が減少したことから昭和10年頃には石の産出を行われなくなり。輸送手段が発達したことなどから、瀬戸内で産出した石を専ら加工する石屋が多くなった。近年では完成品の販売を中心に行っている。

**（5）日本ペイント製造株式会社** 日本最初の塗料会社で、明治14年(1881)に「共同組合光明社」を東京で創立する。当時塗料は輸入品のみであったが、創業者が亜鉛華（白粉）、光明丹（顔料）、ペンキを研究開発し製造販売を開始した。当初は海軍の船舶の補修用の塗料が需要の殆どであったが、明治19年(1886)に皇居造営の際にペンキを納入し、この頃から建築塗装への需要が増えた。明治31年(1898)日本ペイント製造株式会社、商標を小槌に制定する。槌は心の怠惰を打つ槌として社員への訓戒の意味があるという。明治41年(1908)、それまでは塗料の販売のみであったが、塗装工事の請負を開始し、当時の国鉄の橋梁や駅舎の塗装に関わった。昭和2年(1927)「日本ペイント株式会社」に改称し、昭和6年(1931)本社を大阪に移転する。現在、日本を代表する塗料製造販売を行う企業である。

**（6）合資会社伊丹商店** 神奈川県横浜市に大正3年に創立。最初期のフローリング会社で、フローリングブロック（フローリングボードにならない短尺材を使用）を考案した、製造・販売から施工までを行った。当時は造船、紡績、工場、外国人商館、劇場、学校などに納入していた。関東大震災で被災するも大阪市で事業を再開し、戦時中は需要が激減し木製プロペラを生産した一時期があったが、戦後はGHQや紡績工場増産によるフローリングの需要があり復興の軌道にのる。昭和25年(1950)に伊丹木材株式会社に改組し、現在も木質床材の専門業者として営業している。

**謝辞** 本稿を作成するにあたり、国立大学法人京都大学施設部、株式会社松村組、LIXIL 資料館 後藤泰夫氏、内田隆雄氏、伊丹木材株式会社にお世話になりました。記して謝意を示します。

## 参考文献

- 京都大学建築学教室六十年史編集委員会『京都大学工学部建築学教室六十年史』昭和55年
- 京大建築会『創立期の京大建築学教室：創立45周年記念公開座談会』1965年
- 京都大学広報委員会『京都大学建築八十年のあゆみ 京都大学歴史的建造物調査報告』1977年
- 『武田博士作品集』武田博士還暦記念事業會 1933年
- 『武田五一・人と作品』博物館明治村 昭和62年
- 長谷川直司『日本の美術 No.544 近代化遺産 産業編』ぎょうせい 2011年
- 足立裕司「武田五一の建築作品とその変遷」日本建築学会大会学術講演梗概集 昭和59年
- 『愛郷』16号 昭和50年11月
- 『愛郷』18号 昭和52年11月
- 『愛郷』25号 昭和59年12月
- 『愛郷』40号 平成12年3月
- 『愛郷』45号 平成17年3月
- 田中緑紅『京の三名橋 下 五条大橋』緑紅叢書49 2019年（復刻版）
- 松村博『京の橋物語』松籟社 1994年
- 下田孝「セメント製造技術の系統化調査」国立科学博物館技術の系統化調査報告 VOL.23 2016年
- 伊丹木材株式会社年表 伊丹木材作成
- 伊丹木材株式会社 HP
- 日本フローリング工業会『フローリングのあゆみ』平成5年
- 日本ペイント株式会社社史編纂室『日本ペイント百年史』昭和57年
- 日本ペイント HD HP
- 株式会社 INAX『日本のタイル工業史』1991年
- 大阪窯業階部式会社『大阪窯業株式会社五十年史』昭和10年
- 財団法人文化財建造物保存技術協会『重要文化財 山口県旧県会議事堂保存修理工事報告書』平成17年